

NHK SPECIAL

スペシャル

東日本大震災から10年 NHKスペシャル8本を集中編成

津波避難 何が生死を分けたのか

3月6日(土) 午後9:00~9:59 [総合テレビ]

1万8千人を超える東日本大震災の津波の犠牲者。津波からどう逃げれば助かるのか。これまで逃げ遅れは個人の意識の問題として語られてきたが、津波から生き残った人たちへの聞き取り調査から“生死を分ける避難行動”が見えてきた。

なかでも、たった一人の避難の意思決定が周囲の人たちに連鎖しながら、時には何の関係性のない人々の避難につながる「避難カスケード（避難の連鎖）」が多く命を救ったことが見えてきた。石巻の小学校では校長の決断がカスケードを形成。児童を連れ高台に逃げ、子を探す親が自然と後を追い避難が広がり、さらに目撃した無関係の住民の避難にまでつながった。カスケードは地域を安全な避難に導くカギと研究者たちは考えている。

一方、カスケードがうまく機能せず犠牲が出たケースや、外出先に一人にいるなど“死につながる危険な避難行動”も見えてきた。

番組では、地震発生から津波が三陸沿岸をのみ込むまでの数十分間を軸に、新たな津波映像や予想外の動きを見せた津波の動きをCG化しながら、避難行動の何が生死を分けたのかを明らかにする。



ドラマ「星影のワルツ」

3月7日(日) 午後9:00～9:59 [総合テレビ]

震災の実話に基づくドラマ。東日本大震災から3日、福島沖15kmの海上で自宅の屋根に乗って漂流する男性がイージス艦に救助された。南相馬市の自宅で津波にのまれた60歳の農家・大谷孝志(遠藤憲一)。妻恭子(菊池桃子)を奪った海で、たったひとり43時間絶望と戦った。耐え難い寒さと渇き。絶え間ない余震と押し寄せる瓦礫。そして目の前で爆発する福島原発…。何度も死を覚悟し、妻との日々をふりかえるたび奇跡のように流れ着く希望の品々。「恭子、生きるというのか」。クラゲの光に励まされ、妻が愛唱した歌「星影のワルツ」で生きる力を取り戻す。

震災前のあたりまえの日常が、どれほど貴重な時間だったか…。実際の救出映像や震災直後のニュース映像を随所にはさみ、忘れかけた10年前の震災の記憶を新たにしながら、家族の絆と人間の底力を描く感動の物語。

<出演> 遠藤憲一、菊池桃子、川栄李奈、岡山天音



イナサ～風寄せる大地 16年の記録～

3月8日(月) 午後10:00～10:59 [総合テレビ]

あの大津波から10年。今も仙台・荒浜で生きる人々の16年間の記録。取材が始まったのは2005年。風をたよりに四季を追ったカメラは、自然に寄り添い生きる人々、人と人のつながり、そして何気ない家族の日常を記録した。

春、大漁と豊作をもたらす南東の風“イナサ”。“情けのイナサ”は震災後の荒浜にも、いつもの春と同じように吹き渡る。漁師の佐藤吉男さん・松木波男さん・農家の佐藤利幸さんを軸に、津波によって“失われたもの”“変わらないもの”“守り継がれたもの”を描く。

「困難を前に、人は何をよりどころにして生きるのか」。コロナ禍の今だからこそ、荒浜に生きて、荒浜に死んでゆく、日本の集落の営みの力強さを見つめる。



私と故郷と原発事故

3月9日(火) 午後10:00~10:49 [総合テレビ]

かつて2万人が暮らしていた静かな田舎町・福島県浪江町。ディレクターの故郷だ。全町民が避難を余儀なくされた東京電力福島第一原発事故から10年。中心部の避難指示は3年前に解除されたが、人口は事故前の10分の1以下。住民同士のつながりは薄れ、町の姿も人の暮らしも、思い描かれた復興とはほど遠い。

なぜこんな状況になったのか。ディレクターは、友人・知人の消息をたどり、町の幹部や国のキーマンを訪ね歩き、この10年の歩みを改めて見つめ直すことにした。賠償をめぐる引き裂かれた町、時に住民が復興の足を引っ張ったという現実、それでも続けられた数々の努力…。

見えてきたのは、語られてこなかった事実や思いが多々あること、そして、そこにこそ原発事故の本質があるということだ。

原発事故は一つの町から何を奪い、何を破壊したのか。その中で人々は、何をよりどころにどう生きようとしてきたのか。見過ごされてきた小さな声に耳を傾け、原発事故の本質と、人々の10年の生きざまに迫る。

調査報告 “除染マネー”

3月10日(水) 午後10:00~10:49 [総合テレビ]

東京電力福島第一原子力発電所の事故から10年。除染事業などに投入されてきた5兆円を超える“除染マネー”。国は地元の強い要望を受けて「被災地の生活を取り戻す」ために全域除染を原則に掲げ、前例なき巨大事業を行ってきた。

この10年、除染をめぐる、何が起きていたのか。情報公開で入手した膨大な資料を元に専門家らの協力を得て、“除染マネー”の使途を検証。

独自調査と当事者たちの証言から、日本が推し進めてきた巨大プロジェクトの全貌を見つめる。

震災 映像記録 ～100 か所の定点映像が映す“復興”～ 3月11日(木) 午後10:00～11:13 [総合テレビ]

NHKは、東日本大震災の発生直後からこの10年間、甚大な被害が出た岩手・宮城・福島の被災3県の100か所の定点にカメラマンが定期的に通い、復興への歩みを映像で記録し続けてきた。

6000カットにも及ぶ膨大な「定点映像」。そこには、災害公営住宅や防潮堤などのハード面での再生のみならず、津波や原発事故の被害から暮らしや生業を取り戻そうとする被災地の人々の復興に向けた動きも事細かに記録されていた。

取材班は今回、定点映像に記録されていた人々を探り出し丹念に取材。彼らの証言からは、思うように進まない被災地の「復興」の実情も見えてきた。

番組では、「定点映像」や、NHKが震災から10年間、被災地で収集してきたアンケートなどをもとに、復興の知られざる物語や未曾有の災害からの復興とはいったい何なのかを、被災地の取材を続けてきた大越健介キャスターとともに考えていく。



いま言葉にできること まだ言葉にできないこと ～“震災遺児”10年の歩み～ 3月13日(土) 午後9:00～9:49 [総合テレビ]

東日本大震災で親を亡くした遺児は約1800人。NHKは震災直後から多くの子どもたちと会い、取材を重ねてきた。10年目を迎え、改めて彼らを訪ねると、取材に応じたくないという子どもがいる一方で、こちらが意外なほど、堰を切ったように話し出す子どもも大勢いた。家族のなかにさえ存在する悲しみの温度差、新しい形となった家族への気遣い、そして周囲からの過剰な期待への違和感…。なぜ彼らは語ってくれるのか。遺児たちの支援を続ける団体は、「進学や就職で都市部に出て孤立感を深めたり、遺児同士の間でも震災の記憶が薄い世代との温度差が広がったりして、心を許して話せる場を求めている」という。

「なぜ家族は犠牲になり自分は生き残ったのか」、「遺児である人生をどう全うすべきか」、「震災の経験に意味を見出せないか」……。答えのない問いを続ける、彼らの言葉に耳を傾けるとともに、支援団体の大規模なアンケート調査から、それぞれの人生を歩もうとする遺児たちの姿を見つめたい。

廃炉への道 2021

映像記録 原発事故10年の軌跡

3月14日(日) 午後9:00～9:59 [総合テレビ]

メルトダウンした3つの原子炉を「廃炉」する、世界でも前例のない取り組みを記録するシリーズ「廃炉への道」。

東京電力福島第一原発の事故から10年の節目を迎える今回、これまでの軌跡をたどりながら、手探りの中で進む廃炉作業と地域復興の現在地を示す。国が最長40年かかるとしている廃炉。最初の10年で工程表はすでに5度改訂され、計画の後ろ倒しが相次いでいる。近づくことすら難しい原子炉周辺の強い放射線、膨らむコスト…NHKが独自に記録してきた映像をひも解きながら、この10年で見てきた壁とその先の廃炉への道を展望する。

さらに、周辺で住民の帰還が進む中、避けて通れないのが、廃炉作業に伴って発生する膨大な放射性廃棄物をどう処分するかという問題だ。廃棄物の行き先は今も決まっておらず、この10年ほとんど議論が進んでこなかった。

そうした中で去年7月、日本原子力学会が廃炉が終わった時の姿＝「最終形」について、廃棄物の処分方法にも言及した複数の案を初めて提示。国や地元住民による議論が始まっている。「廃炉」10年の軌跡を見つめ、「福島これから」を展望する。

※放送予定は変更になる場合があります。